

## 知恵を絞り商機を生かす日光二社一寺

栃木県日光市の世界遺産・日光二社一寺近くに、「ベル」という名の古くからの喫茶店がある。5年ほど前から外国人観光客が訪れるようになり、店内は毎晩、満杯状態になっている。近くの宿泊施設から紹介を受けたさまざまな国籍の人々が夕食のために集まってくるからだ。

日本を訪れる外国人旅行者の伸びが続いている。本県でも国際観光都市・日光市の増加が著しい。2017年の宿泊者は、統計を取り始めた07年以降、初めて10万人を突破した。台湾や中国などのアジア圏が最も多いが、北米、欧州、オセアニア3圏の合計は前年比45%増と急伸している。

外国人は、食事なしの素泊まりのホテルを好む傾向が強く、市内の居酒屋やファミリーレストランは一気に国際化している。コンビニやスーパーで買い出しをする姿を見掛けない日はないという。

日光は、観光資源の豊かさから多くの外国人観光客を取り込んでいるが、栃木県全体で見るとまだまだ物足りない。

外国人延べ宿泊者数は昨年、26万人で残念ながら全国32位に甘んじた。ちなみに3年前の16万人、25位と比べると、人数で10万人増えたものの順位を落とし、外国人客を取り込めていない実態が分かる。

9月から日光東照宮にSuica（スイカ）など交通系電子マネー9種類の決済システムが導入され、自動拝観券売機に組み込んで運用が始まった。東照宮で現金以外の支払いができるのは今回が初めて。

拝観者の3割前後が利用しており好評を博している。英語、中国語、韓国語の3カ国語にも対応し、外国人も気軽に利用している。訪日外国人客急増という商機を受けて、日光二社一寺は必死に知恵を絞っている。

下野新聞社 論説委員長 高橋淳



昨年3月に平成の大修理が終わり、まばゆいばかりの輝きを放つ日光東照宮の陽明門